

創刊号

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区北1西13
 教育文化会館内
 電話 011-251-4774
 F A X 011-251-4776

札幌くらぶ



お酒を片手にくつろいで、管楽器・弦楽器の演奏を聴く

こんな素敵な、そしてとっても贅沢な時間を過ごしたことがありますか？CDやレコードではなく、演奏者の息づかいが聞こえるほどの目の前での生演奏を楽しむ豊かな時間です。

去る12月21日土曜日、札幌の応援団「札幌くらぶ」の会員と札幌の楽団員の交流会を行いました。交流会は2部構成で、最初の部では今後の「札幌くらぶ」の活動について1時間ほど意見交換をしました。昨年、北海道新聞の紙面で札幌について様々な面から紹介して下さった古家記者をお招きし、話をさせていただきました。参加者からの様々な質問や要望に、楽団員の方や事務局の方がたじたじとになってしまう場面もありました。

第二部はビールを飲み、オードブルをつつきながら楽団員の方々と楽しく語らう親睦会でした。ここで思わぬ出来事、といってもあらかじめ楽団員の方々からお話があったのですが、札幌の管楽器と弦楽器の演奏を聴かせて頂いたのです。お酒でちょっと喉を湿らせくつろぎながら聴きますと、音色が心に染み入って深い感動を生み出します。会場は札幌駅北側のビルの16階のサロンで、演奏者の後ろの窓に映る夜景が演奏をさらに雰囲気

を盛り上げます。チェロを演奏して下さった土田英順さんは今年の1月11日で札幌を退団されましたが、今後は「札幌くらぶ」の会員として札幌を応援していくという入会宣言をしていただく等々、楽しい2時間はあっという間に過ぎてしまいました。

楽しく過ごした3時間

楽団員との交流会



指揮者にきく

仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者

えん こう じ まさ ひ こ
円光寺雅彦さん

応援団が、良いホールが、
オーケストラを育てる。



円光寺雅彦さんのプロフィール

1954年東京生まれ。
77年桐朋学園大学卒業。
80年から81年までウィーン留学。
81年東京フィルハーモニー交響楽団副指揮者に就任、86年から91年まで指揮者を務める。
89年仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者に就任し、現在に至る。

1996年12月24日、札幌パームホールでの第九の合唱リハーサルの前に、仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者の円光寺雅彦(えんこうじ まさひこ)さんに、お話をうかがいました。

円光寺さんは、12月26日に、札幌市民会館で行われた「札幌の第九」の指揮をなさいました。

— 今年は、第九を何回くらい演奏されるのですか？

円光寺 今年は何回もなくて、3回なんです。仙台フィルの指揮者をしているんですけど、当番の年はすごく多くて、10回くらいになりますかね。今年も、音楽監督の外山雄三先生が当番なので。

— 先日、ラジオで、「第九って、第三楽章までが長くて、ひたすらガマンなんですよ。第四楽章になって歌が始まると、ああ来て良かったと思う。」という話をされていて、笑ってしまいました。

円光寺 やっぱり、第一楽章から聴いていただくと、第四楽章の喜びも倍増するんですよ。

札幌とは長い付き合い

— 札幌との係わりはいつから？

円光寺 僕は、指揮の活動を、1981年に、東京フィルの副指揮者で始めたんですが、83年に札幌から呼んでいただいたのが最初です。

それ以来、年に数回は呼んでいただいていますので、長いお付き合いだと思います。

— 札幌を指揮した中で、印象に残っている演奏会や曲はありますか？

円光寺 わりと早い頃に、厚生年金会館で、トレチャコフさんというヴァイオリンのすごく偉い方と、シベリウスの協奏曲だったと思いますが、共演したことです。定期とは別の演奏会でしたが、駆け出しで、オーケストラに色々ご迷惑をお掛けした頃の話です。

— 道内を、札幌と演奏旅行されたこともあるそうですが、いかがでしたか？

円光寺 僕が素晴らしいと思うのは、演奏旅行で出かけるのは、だいたい人口が1万とか2万人の町が多くて、音楽会場もなくて、体育館でやったり、たまにはホールがあるところもあ

りますが、そういう町で千人も聴きにいらっしやるんです。こんなことは、なかなか他ではないですよ。

大阪はストレート

—— 国内あちこちで指揮をしていて、地域地域で、聴く方の反応の違いというのは、感じますか？

円光寺 土地による違いというのは、ものすごく感じますね。

一番わかりやすいのは、大阪のお客さんで、これは半分冗談ですが、プログラムでも、ある程度ボリュームがあると、「ああ、今日は盛りがエエなァ」というみたいな。

いい、悪いっていうのをストレートに表わすのと、それほど、お上に従わない土地柄だから、オーケストラの練習でも、指揮者が1回止めてしまうと、ワーッと賑やかに、あちこちのパート同士で話し合いが始まってしまいます。

オーケストラは、ゆっくり愛してほしい

—— 地方にあるオーケストラと地域との関係について、どのように考えていらっしゃいますか？

円光寺 まず、市民の皆さんに愛していただかないと、オーケストラというのは成り立っていきません。

日本の場合、だいたい人口100万人で、オーケストラが一つという割合なんですけど、例外として、群馬交響楽団というのがあります。

高崎市の人口は25万人、群響ができた当時は10万人かそこらでしたが、N響、東京フィル、東響に次ぐくらいの古いオーケストラで、



「札幌の第9」練習風景

すごく市民から、根強い支持を受けているんですね。高崎に行くと、まちの人たちが、群響を愛してるなっていうのを、非常によく感じます。

また、東京では、あまりにも競争が激しくて、オーケストラも常に目立つような、打ち上げ花火みたいなことをしていないと、マスコミも注目してくれないという部分がありますが、地方のオーケストラは、東京に比べると、時間もありますし、その地域にそもそも一つしかないわけですから、色々なものをやらなくてはならない。僕らのような若い指揮者が腰を落ち着けて、実力を身に付けていくには、地方オーケストラというのは、いいと思うんです。

—— 全国には3,200以上の市町村がありますが、オーケストラがあるところは本当に少ないですね。

円光寺 これからリハーサルをする「第九」にしても、ドイツ語の歌詞は何カ月か勉強すれば、ほとんどの人が覚えられますが、公演ができるというのは、そこにオーケストラがあるということなんです。オーケストラがないと、合唱団だけでは、どうしようもないんですよ。

オーケストラというのは、事務所も指揮者も楽員もがんばって、上手になって、向上していけば、利益が上がるというものではないことを、一般の方にわかっていただいて、楽しむためのものとして、オーケストラを応援していただけるとありがたいと思います。

ホールが作る、オーケストラの響き

—— オーケストラが上手になるのに、何が必要ですか？

円光寺 一番大事なのは、練習も公演も、音楽専用ホールでやることでしょうね。

ヴァイオリンの金属の線も、木に張って、初めて音がするわけです。オーケストラの場合も同じで、オーケストラだけというのは、弓や駒、弦の部分だけしかないようなもので、実際に響きを作るのは、木に当たる部分、ホールなんです。日本のオーケストラの場合、専用ホールがないので、非常に困っています。

ヨーロッパのオーケストラだと、10万人くらいの小さな町でも、必ず、音楽専用ホールがあって、その舞台上で練習して、その舞台上で演奏会をやってというのが、できるんです。

東京だと、土地代も高いし、無理がありますが、地方のオーケストラは、やっぱり専用ホールを持ちたいと思いますね。

ホールの音が良ければ、自然にオーケストラも上手になっていくし、お客様も増えるだろうし、ということになっていくのではと思います。



元気の素はベートーヴェン!!

—— お好きな作曲家や曲は？

円光寺 やはり、指揮者になったからには、ベートーヴェンをちゃんと振れる指揮者になりたいというのが最終目標です。今は、マーラーも楽しいとか、シベリウスもいいとかかって、色々な曲をやりますけれど、最終的には、ベートーヴェンがちゃんと振れるかどうかで、指揮者は評価されるんじゃないかという気はしています。

あと、もちろん、モーツァルトもブラームスもですけど。

—— 元気を出したいなという時に、聴く曲は？
円光寺 元気を出したい時？やっぱり、ベートーヴェンじゃないでしょうか。ベートーヴェンは、すべていいですね。ゆっくりな楽章は、本当に、一番、天国に近いという感じがしますし、運命も、第九も、やっぱり元気が出ますね。

—— おヒマな時は、何をなさっていますか？

円光寺 子どもと遊んでいます。まだ小さくて、6歳の幼稚園の娘なんです。

—— 「札響くらぶ」に、何か一言。

円光寺 活動がいい方向に行くことを期待しています。時間がかかりますが、少しずつ、辛抱強く応援していただけたらと思います。札響を愛して、盛り上げていただければ、いいオーケストラですから、うんと盛り上がりますよ。

《臨時インタビューの感想》

合唱団のメンバーが行き交う、パームホールの通路で、円光寺さんにいろいろお話していただきました。インタビューの後、着替えをし、楽譜とタオルを手に、練習室に入って行く姿を見て、指揮は肉体労働でもあるんだと実感しました。

内緒ですが、円光寺さんって、家のココア色のクマさん(玄関で留守番をしているので、通称バンクマといいます。)に似てるんです。(T.K.)

オーケストラなんでもQ&A

Q. アンコール曲はどのように演奏するのですか。

A. アンコールはフランス語で「もつと」という意味です。演奏会の場合は、単に、もう一度演奏者の顔が見たいという場合もあるでしょうが、一般的に「もつと演奏を聴かせて」という意味合いが強いでしょう。

初演曲の場合はその曲のサワリを再度演奏しますが、一般的には、サービスとしてプログラムに無い曲を演奏することが多いのです。その場合、演奏

会のプログラムの最後の曲との釣合を考慮してアンコール曲を選びます。

また、マーラーとかブルックナーとかの交響曲のように長大な交響曲の後には、普通はアンコール曲は用意されません。



クラシックファンが増えるような環境づくりを

吉尾公孝

クラシック音楽ファンの中に静かな変化が起きている。

かつてのように、音楽はクラシックかポピュラーかで大別されていた時代とは異なり、現代は音楽を求める層が多様化し、そのニーズを満たすための多彩な音楽が提供される時代となっている。だから、いわゆるクラシック音楽の世界でも、時代の要請にマッチした音楽を供給しなければ聴衆はついて来ない。しかし、一口に時代の要請に応える、と言っても事は容易ではないし、単に良い音楽を演奏するというだけでは、人は集まらない。

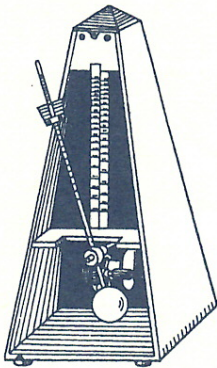
クラシック音楽は、その持つ大きさ、華麗さ、迫力などには年代を超えた共感が得られるが、反面、ファンだけに通じる独特な雰囲気やマナーがあり、ファン以外の人に敬遠される要因があるように思われる。例えば、交響曲の楽章の間の「拍手は恥だ………」という雰囲気や、また、全曲の演奏が終わった後の儀礼的な長い拍手、拍手に応じて立ち上がったオーケストラの楽員がそのまま、指揮者だけが聴衆に頭を下げるという奇妙な風習などは、一般の社会習慣とはかけ離れたもので改善の余地がある。

前回のこの紙面で、指揮者の秋山和慶氏が、「札幌のファンは静か過ぎる」と述べておられたが、聴衆の一人としては「オーケストラの楽員たちは、もう少し表情を豊かに………」と期待しておきたい。

多彩な音楽の供給という立場からは、クラシック音楽にジャズやロックなどの競演を導入して欲しい。

また、音楽会の開演時間を欧米並みに午後8時からとしてみてもどうか（夏期だけでも）。

6時や6時半に音楽会に行ける人は、忙しい現代では限られており、交通事情が整っている札幌などでは可能と思われる。



Q. オーケストラの楽器配置は替わることがないのですか。

A. 近代のオーケストラの楽器配置は、ほとんど固まっています。しかし、指揮者の好みや、定期演奏会の会場に特殊なクセがあるオーケストラの場合には独特な配置をするケースもあります。

また、一般的には、オーケストラの弦楽器の後や管楽器は山台を使って高くし、その方がアンサンブルしやすく、音量の幅も出てきます。ところが、管楽器の音が弦楽器の音をかき消すほど大きく鳴るオーケストラでは、わざわざ山台を取り払って平場にします。この場合、ホルン

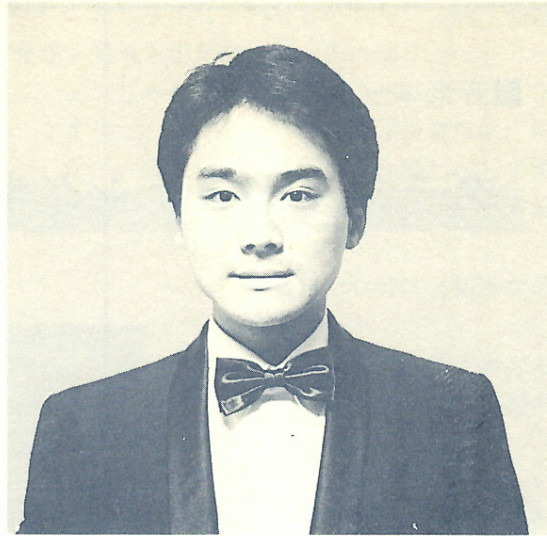
の音が前に出にくいいため、ホルン・セクションを指揮者の右手（舞台上手）から指揮者の左手に移すが、正面の後方に持つことが多いようです。

この例の一つにストコフスキーのフィラデルフィア・オーケストラがあります。オルガン・サウンドと呼ばれる良く鳴る管の音が弦楽器奏者の身体に吸収されて更に柔らかく響いて、かの栄光のフィラデルフィア・サウンドが作られました。

PLAYER'S TALK

札響 打楽器奏者

おおがいと えいしん
大垣内 英伸 さん



大垣内英伸さん

オオダイコを打つのがオオガイト

札響の打楽器奏者の大垣内です。打楽器なので、「おおだいこ」に似た名前「おおがいと」と覚えてください。

さて、私の職場における位置は、お客さんから見て、左手又は最後方で、いわゆる「鳴りもの」を手掛けています。「鳴りもの」の中身は、小太鼓、大太鼓、シンバル、トライアングル、木琴……と、そう、皆さんも一度は小学校の時に手にした楽器です。

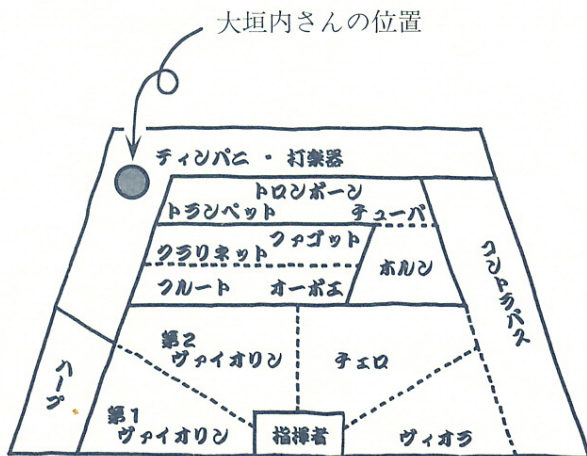
タイコと共に東へ西へ、波乱の人生

私も、生まれ育った三重県の小学校では手にしましたが、本格的に始めたのは高校からです。それまでは、フォーク少年で、毎日毎日、ギターコードの練習をしていました。それが、高校に入るやいなや吹奏楽部に入り、打楽器を選んだのです。(吹奏楽部に入っていた兄の影響もあり、本当は、ドラムセットをやりたいのですが、そのクラブにはありませんでした。トホホ)

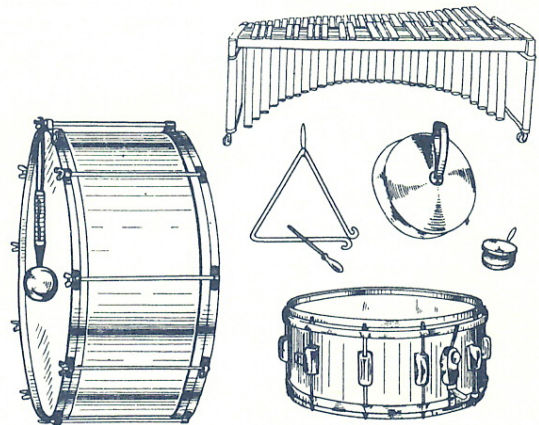
やっていく内に突然、「これで飯を食いたい！」と

思い立ち、回りの大反対にもめげず、レッスンに通い始めました。それからが波乱万丈、猪突猛進、魑魅魍魎、とにかく大変でした。書き切れませんので、カットしますが、聞きたい方は聞きに来てください。何とか二浪して芸大に受かり、何とか4年で卒業したら、これまた大変でした。卒業したらオーケストラプレーヤーになる夢を抱いていましたが、各オーケストラは毎年オーディションを行っているわけではないのです。

フリーで、いろんな仕事をしている内、オケではないのですが、「大阪市音楽団」というプロの吹奏楽団に受かり、3年間在籍しました。そこではオケにはない、いろんなことを勉強させてもらいましたが、どうしてもオケをやりたくて、東京でのフリーの活動を再開、たまたま、その年に4つあったオーディション(こんな年はめったにありません)の最後が札響で、現在に至ったのです。(札響に入って4年が過ぎました。)



札響の配置



様々な打楽器

優雅な？楽員の実態

さて、「好きなことで飯を食う」という夢を実現できたのは、幸せではありますが、オケ・プレーヤーは大変です。楽器はほぼ自分持ち、知らない曲はCDを買い、スコアを買い、自分の練習を日夜欠かさず、コンディションを整えて、プレッシャーに打ち勝ち、奥さんに打ち勝ち(笑)……とにかく皆さんが思うほど優雅ではありません。

では、何故続けるのでしょうか？それはやはり、演奏が終わって、全員が立った時に受ける拍手と、その後のビールでしょう。拍手は、今日の演奏の一つのバロメーターだし、演奏者の肥やしでもあります。

素敵な演奏には、たくさんの拍手を

そこで、札幌くらぶの方をお願いします。好きでない演奏の時は愛想程度でいいですが、素敵な演奏の時は拍手を盛大にください。我々も、皆さんが全員スタンディング・オベーションになるぐらい頑張りますので、これからもよろしくお願いします。



「札幌くらぶ」って？

「札幌くらぶ」は札幌を応援するグループです。札幌をもっと知り、楽団員と親交を深めることなどを活動の目的としています。季刊で会報「札幌くらぶ」を発行しています。この「札幌くらぶ」を通じて、もっと札幌のことを理解してもらえたらいいなと考えています。

入会を希望する方は定期演奏会の会場で入会を受け付けています。また、札幌の事務局でも常時受け付けています。年会費は2000円です。あなたも、ぜひどうぞ。

会報「札幌くらぶ」はどの様に手元に届くの？(配布方法について)

会報「札幌くらぶ」は年4回発行されます。完成しましたら、会員の方に郵送します。ちょっと時間がかかるかもしれませんが、楽しみにお待ち下さい。

「札幌くらぶ」に対するご意見をお寄せ下さい。

札幌物語 II

暖房完備？の練習所

札幌は昭和36年7月1日に創立し、中島児童会館ホールで、客席部分を横に使って練習を始めました。

涼しいはずの札幌の夏も、冷房の無いホールでのオーケストラの練習は蒸し暑く、窓も非常口も開け放って汗を流しながら練習しました。非常口を出たところには大きな木の木陰と鴨鳴川があって、休憩時間にはちょっとしたオアシス気分が味わえました。指揮者もほとんどの楽団員も出てきて、目に優しい緑の木陰で一時的涼を楽しみました。

やがて、現在のパークホテルの建設工事が始まりました。公園側の窓を開けると、風の強い日などは、もうもうと舞い上がった砂塵が入り込んできて、管楽器奏者の口の中がざらつき始め、木管楽器はキイのなかに、金管楽器はピストンやトロンボーンのスライドに砂埃が忍び込み、ジャリジャリと不快な音をたて始めるのでした。



当時の管楽器はほとんどが輸入された外国の製品でした。今日の価格に比べると極めて高価なものだったのです。教員の初任給が1万2千円程の頃でしたが、楽器は30万から50万円もしました。特に手に入りにくいヘッケル社のファゴットなどは、その当時でも100万円以上で、注文してから手にはいるまで5年もかかる、といった時代でした。

わが身よりも楽器のことを思い、泣く泣く窓を閉め、まさに夏には暖房完備の練習所になり、「心頭を減却すれば火もまた涼し」と心で唱えながらの練習になりました。

6月には北海道神宮の祭りがあり、中島公園では縁日が開かれます。不思議なことに屋台のにぎやかな呼び声はさほど邪魔になりませんでした。ところが、イカ焼きなどの焼き物の香りは、砂塵よりも巧妙に忍び込み、平均年齢22歳の若い楽団員の胃袋を刺激しました。

(Y.T.)

FAN NETWORK

やっぱりプログラムと料金しだい

この度、札幌くらぶへ入会しました数少ない(?)札幌のミーハーファンの一入です。時には千歳や北広島まで“追っかけ”もやっています。

とかく響きがどうの、技術がどうのと言われる方もいらっしやいますが、そんなことは私にはよく解りません。クラシック音楽が好きで、地元にある唯一のオーケストラとして、昔から応援しているだけなのです。

定期の会場では年輩の方ばかり多いのをいつも不思議に思っていました。が、昨年始まった名曲シリーズでは結構若い人も来ています。やっぱりプログラムと料金なのでしょう。

この会では、演奏の練習風景が見学できたり、交流会があるというので、今から楽員の方とお話できるのを楽しみにしています。こんな私に共感なされる方、隠れミーハーファンを脱してもっと声援を送りましょう。

札幌市中央区 丁子

ミニコンで身近な札幌アピール

クラシックの楽団員といえども町へ飛び出し、市民との交流を持つことを忘れてはならない。なぜなら、いかに名演奏を聴かせるオーケストラであっても、聴衆から愛され、満席になるような演奏会を開くことができないならば、楽団運営が成り立たないからである。

レストランでも喫茶店でもいい、デュオやトリオで、コーヒー代プラスαぐらいの料金でスタンダードな曲を聴かせる。そんなミニコンから札幌を身近なものにすることができるのでは……

札幌市南区 鈴木道雄



小林研一郎氏の演奏態度に感動

小林研一郎氏を迎えた昨年10月の定期は、これがわが札幌?と驚くほどの素晴らしい音であり、演奏会だった。

そして何よりも嬉しかったのはアンコールにこたえてくれたことだった。アンコールは音楽会の楽しみの一つであり、その余韻を包んでくれるかけがえのない一曲なのである。

さる新聞報道によれば、演奏会の前日、小林氏が「明日はアンコールを……」と言ったところ札幌は「演奏会は2時間以内という原則があるので……」。すると小林氏は「たった一曲のアンコールに聴衆は喜んでくれる。そんなサービスもできないオーケストラは二度と振りたくない」と言ったそう。

札幌の人气が低迷していると聞くが、原因は案外この辺りにあるのでは……

札幌市東区 斉藤由雄

編集後記

創刊号に登場して下さった皆さんには、年末年始の慌ただしい中、インタビューや原稿依頼で、本当にご迷惑をおかけしました。特に、仙台フィル常任指揮者の円光寺さんは、松の内早々に、ご自宅にドットとお送りしたファックスに、ていねいに目を通してご連絡をくださいましたし、札幌打楽器奏者の大垣内さんは、貴重な大掃除の時間(?)を割いて、原稿を寄せてくださいました。ファクシミリと留守電を駆使しての、紙面づくりでしたが、何とか締め切りに間に合いました。

ところで、「原稿料はないんです。」と、皆さんに最初に申し上げるのを忘れてしまったような気がしますが……

(T.K.)

昨年12月の交流会に参加して、「どうして札幌ファンがこんなにいるんだろう」とびっくりさせられました。「札幌くらぶ」の編集のお手伝いしながらこんな事を思うのは不謹慎ですが……。本当は隠れ札幌ファンがもっとたくさんいるのだらうと思いました。

この交流会の会場の後ろの方で、こそこそ紙を広げて、何やら相談していたおかしな一団にお気づきでしょうか。この一団が編集委員です。しかし、編集委員はこの4人だけではありません。これをお読みになっているあなたも次号の編集委員です。是非、ご意見ご要望をお聞かせください。

(いちろう)

次号の「札幌くらぶ」は4月発行の予定です。